



THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

日版英工機新聞

4月17日 火曜日

第19408号

発行所 日刊建設工業新聞社
〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10
電話03(3433)7151 http://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2018
編集 電話03-3433-7167 mail-ed@decn.co.jp
印刷 電話03-3433-7152 mail-sa@decn.co.jp
広告 電話03-3433-7154 ei-adv@decn.co.jp

総合

(第3種郵便物認可)

明治維新を迎えた日本は、西洋の進んだ技術を導入し早急に近代化しなければならぬとして、有能な技師を欧米に留学させた。欧米の技術を一刻も早く習得させなければならぬが、派遣してから帰国するまでには時間がかかる。このため当面は、西洋の先進国から技術者を時の大臣クラスの高級で派遣してもらい、指導を受けて技術導入を図ることになった。

河川改修に関してはエッセル、ムルデル、リンド、ドレーケらオランダ人技師の下、淀川や利根川、江戸川の測量、利根運河、野蒜港、三角港などで多くの功績を上げた。本連載の5回目でも触れたが、全体の9割ほどが完成していた信濃川大河津分水工事を中止さ

明治維新150年と治水の歴史

竹林 征三

〈7〉外国人技師リンドによる進言の失敗

ない。片野萬右衛門の心は、治水のためには「忍」一字であった。

を暗せず、況や我が北越水害の深淺厚薄や、肯て深く咎むるに足らざるなり。災害を行つたのは一度だけ。害を蒙る所の人民にして眼力未だこれに及ばず」と書いた。何も分かっている、無知でありにも幼稚すぎると痛烈に批判している。リンドは利根川から江戸川への分水量を増やすよう進言したが、その結果として江戸川の洪水被害が増え、元の分配比に戻された。長岡の大庄屋に生まれた大竹貫一は土木工学の志もあつたが、国家的見地から衆院議員となり、郷里の大洪水に対し大河津分水の実現を迫った(当選16回)。

この求めに対し、英国人技師の専門技師であるブントが、そのために命をかけた福束輪中の庄屋・片野萬右衛門(1809)文化6)水道、灯台など日本になか多々の功績があつたことば確かである。オランダから舟運や低水路などの技術は学んでも良かったが、治山・治水は到底無理だつたと思つ。フランスよりもマイナスの設計で、1880(明治13)年に完成している。最大の木曾三川の輪中地帯が洪水の宿命から脱却するに、長良川と揖斐川の分離完全には断ち切つたことである。そして、この「参考文獻」『物語日本木曾川のことを熟知している(富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所理事長) 週1回掲載